

してみんなを安心させた。

坂部一家の受難が続く。鴨緑江の橋を渡れば朝鮮へ、日本へと引き揚げられるのに、安東は満州国である。

また東洋紡績安東営業所の上司は奉天に支社長がいる系統なので坂部一家は安東から奉天へ向かって引揚げるのが道筋であった。そしてコロ島へと続くのである。

先ず安東から無蓋車で奉天に着くまで列車めがけて暴民の略奪に、押し寄せてくる泥棒の群に幾度となく襲われるのである。女の人を抱きかかえて逃げるソ連兵。女の人の悲鳴があがる。その後を追う男は倒される。全くこの世とは思えない地獄の無蓋車は停車中の出来ごとである。

奉天に着いて治安のよいのに驚喜し、みんな労働してわずかの賃金で越冬し口糊をしのぎ、二十一年、奉天、錦州、コロ島に着き、乗船し出帆した。何日目か日本の陸地がみえたので、みんな涙を流して万歳を叫んだ。佐世保に上陸し、えんえんと東海道を走り郷土、愛知県三河についた。

父は東洋紡績(株)にむかえられ名古屋からやがて四日

市の営業事務所に転勤し頑健に生まれ東奔西走した。

坂部秘一氏は小学校四年に編入し中学を卒業、昭和三十一年、工業高校機械工学科を卒業し社会人として一家をかまへ、苦勞して家族を支えた老両親に孝養をつくした。その姿に感服した。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## 引揚げ犠牲者に捧げる

### — 満州開拓事業の回顧 —

京都府 水上七雄

終戦の結果、永年にわたり営々として築いた生活基盤を捨て、あるいは追われて、苦難の引揚げを強いられた同胞は数多い。

中でもソ連軍の侵入により、山中逃走、親子離散、集団自決、長びく收容所生活などで、内地引揚げの日を夢見ながら、広野の果てに屍をさらした同胞はおよ

そ数万人に及ぶであろう。このような犠牲者については正確な調査総計もなく、もちろん、靖国にも祭られず、世に顧みられることも少なくて半世紀が過ぎようとしている。

この引揚げ悲劇をもたらした満州開拓団や青少年義勇軍とはいかなる集団であったのか、その大略を述べることが、先駆者の一人であった私の義務であると思う。

#### 青雲の志に燃えて

私は現在京都市に住んでいるが出身は石川県である。大正四年一月、あの木曾義仲で有名なから峠に近い河北郡英田村の池ヶ原という五十戸余りの山村に、百姓与三松の四男として生まれた。

村の小学校の尋常科を卒業、年号の変わった昭和二年の春、名門の県立金沢一中に入学、金沢に下宿して五か年の中学生生活を送ったが、当時は農村恐慌で「不景気」の声は全国の津々浦々にまで満ちていた。

したがって高校、大学へ進学することは、農家にとっては身代をつぶすことにもなるので、私は進学に

ついては大いに迷った。

昭和六年の九月十八日に満州事変がぼっ発して、関東軍が張学良軍閥を追い、前の清朝皇帝を迎えて「五族協和」の「満州国」が建設された。私は幼稚にもこのニュースを喜んで聞き、皇軍の進撃に拍手したのであった。

私は映画館で見た入江たか子が主演する「満州建国の黎明」と題する映画に感動、広い満州、蒙古の天地を想像して心が躍ったのであった。今日の若者がシルクロードやロマンチック街道にあこがれるように、私はすっかり満蒙大陸熱に取り付かれたのであった。

折しも昭和八年一月、全国の新聞に、今回新しく満州鏡泊学園が設立され、日本で生徒募集が行われることになった、と報ぜられたので私は早速規則書を取り寄せて見た。

その設立趣意書によれば満州鏡泊学園とは、満州吉林省の景勝地・鏡泊湖の湖畔に設立される開拓の幹部養成への学園であって、全国から中等学校卒業の男子を募集、「晴耕雨読」の教育を行い、その卒業生には二

十町歩の耕地を与えて理想の学園村を造る…と言うことであった。そしてその設立代表者は国士館理事の山田悌一氏であり、設立発起人には徳富蘇峰、永井柳太郎、柴田徳次郎、大林一之氏らが名を連ねていた。

昭和八年四月、全国から覇氣満満とした、青雲の志に燃えた二百余人の青年が東京世田谷の国士館高等拓殖学校に集合し、渡満までの四か月間の予備訓練を受けた。農事実習、軍事訓練、武道、中国語などがその主な内容であった。もちろん私もその中の一人である。

#### あこがれの満州・鏡泊湖

八月一日我々鏡泊学園の職員学生二百余人は山田悌一総務を先頭に、一個中隊、三個小隊、十二個分隊の軍隊編制で東京駅発、渡満の途についた。神戸港からハルビン丸で玄界灘を渡り、大連港に上陸し、旅順の戦跡や、奉天城、国都新京を經由して鏡泊湖の最寄りの敦化市に着いたのが、八月十一日であった。

敦化は敦化県の県城で人口約三万余、周囲を長白山脈の低い山並みに囲まれた盆地で朝鮮族も多く、学園生にとっては見る物聞く事、珍しいものばかりであった。

た。

当時敦化は関東軍の「匪賊」討伐の第一線で軍の機動作戦のため騒然としていた。この敦化で学園生は零下三十度の越冬生活を体験し、軍事訓練や研究班活動、中国語の実習やらに日を過ごした。その冬には関東軍部隊の数次にわたる鏡泊湖一帯の掃討が行われたが、翌春三月には学園主力は百五十キロの国道を馬車隊で鏡泊湖畔に到達し、農家数戸を買収して分隊単位に分屯して解氷期を待つて農耕に着手したのであった。

#### 総務ら「匪襲」に倒れる

湖畔の開田作業が目鼻のついた五月半ばに山田総務は自動車班の生徒らをつれて寧安市に出張した。その帰途を「匪賊」らに襲撃された。一台の自動車であったので、落とし穴に落ちた十四人の一行に反撃の余地を与えなかった。先駆者山田総務の享年は花も盛りの四十二歳であった。匪首名は今に到るも不明である。

山田総務を失って学生二百人の前途は暗転した。日本内地からの学園経営資金が途絶えて一時は食糧にもこと欠く事態となった。

学園は十数人の職員の給料は遅配となり、二百の学生は食糧も不十分なまま、来る日も来る日も、外界とは通信途絶えのまま、昼は農作業、夜は塹壕という籠城生活で、精根つきる毎日であった。こうした孤立無援の七百余日を悲境の鏡泊湖畔で耐え抜いたが、明るい見通しが立たないまま最後に、関東軍から閉校命令が出て来たのであった。

「主力を拓務省開拓団の基幹要員に採用する」というのが軍命令の要旨であるが、学園の存在が軍の警備の重荷になるからでもあった。

軍の命令は絶対で、これに対して学生は、数次の学生大会を開いて協議したが、結局は各自の判断で進路を決めるほかに道はなかった。私自身には特別な就職の手づるもなく、開拓の初志を守って開拓団の基幹要員に応ずるほかになく、同じ立場を取る者が四十余人集まって、前後策を協議したのであった。

#### 開拓団での生活

拓務省経営の開拓団は当初は日本国民高等学校校長の加藤完治氏と関東軍司令部の東宮鉄男大尉の強い主

張によって生まれた。

第一次は昭和七年十月、日本の東北地方の在郷軍人五百人が市川益平中佐に引率されて、北満州の佳木斯に到着し、越冬の上、翌年二月に南方五十キロの永豊鎮地区に入植した。のちの「弥栄村」である。

第二次は昭和八年、鏡泊学園と相前後して東北信越の在郷軍人五百人が、日沢兼次郎中佐に引率されて、同じく佳木斯の南方八十キロの湖南宮地区に入植した。のちの「千振村」である。

第三次は同九年、林恭平氏を団長とする三百人がハルビンの北方の綏陵県に入植して「瑞穂村」と称した。関東軍が学園に命令した開拓団の基幹要員とは第四次城子河開拓団の先遣隊のことであった。当初拓務省や関東軍は相次ぐ開拓団の匪襲に困却してはいたが、やがて結論として開拓移民こそは対ソ戦略の核心、満州建国の「目玉」であると位置づけ、その成否を第四次の開拓団に賭けたのであった。団長には第一次の幹部であった東大農学部実科出の佐藤修、警備司令には同じく第一次の熊谷伊三郎大尉を充て、先遣隊には向

陽山訓練所、三重第二拓殖訓練所、鏡泊学園の各々修了生を充てたのであった。私はこの第四次開拓団先遣隊の一員である。昭和十一年三月には本隊として山形県、宮城県などの農民道場などを経た在郷軍人二百人が到着、入植後に武装して最後の「試験移民」は発足したのであった。

城子河地区は鶏西駅までは五キロ、地味肥沃で水稻、小麦、燕麥、大豆、小豆、馬鈴薯や白菜、野菜なども良く出来て、入植者は豊作に満足して動搖は少なかった。

第四次には城子河のほか、その東方約二十キロの東海駅付近にも哈達河（ハタホ）開拓団の二百人が第一次の幹部員沼洋二（北大農科出）を団長に入植した。

後日の話だが、城子河は炭鉱開発のため主力が吉林省舒蘭県に移転することになるし、哈達河の団はソ連軍の侵入で馬車隊全団で脱出中、麻山の山中で敵に包囲されて貝沼団長以下四百六十三人の全員が自決するという「麻山事件」の悲運に見舞われたのである。

次に第五次開拓団の本隊は昭和十二年に林密線に

沿って哈達河から東へ永安屯、朝陽屯、黒台、信濃村と四つの村落が並んで約百キロにわたって満ソ国境線に展開して、営農、住宅建設、家族招致と着実な成果を見せて来た。

そこで拓務省や関東軍はこれらの成果に気を良くして、二十か年計画・百万戸、五百万人の民族大移動運動”を策定、国策として内地では満州移住協会、農村更生協会などが鐘や太鼓の大宣伝を開始したのであった。

この開拓計画の基礎である用地買収が、どのような手続き手法で行われたか、我々開拓民は一切知らされていなかったが、多分開拓団の到着前に満州国の所在の省県の開拓司などが満州拓殖公社と協力して、土地選定、測量、買収などを行ったものだろう。

私は団では農耕の第一線ではなく、多くは団部事務や、住宅建設現場、連合伐採事務所などの対人関係の事務に当たった。

城子河団では部落のことを郷と名付けた。入植以来、気候も順調で水稻の実りも良く、二年目から郷単位に

個人住宅の建築を始め新妻を迎え、家族招致が行われた。

鏡泊郷でも年の順に内地から新妻を迎えて個人住宅に入った。住宅は赤れんが造りで二戸一棟ではあったが、城子河平野に幾棟も並ぶと、あたりを払う壮観さであった。早速マスコミは「大陸の花嫁」と書き立てた。集団営農、個人生活という段階である。

#### 青少年の義勇軍

昭和十四年春、私は七年振りに生まれ故郷の石川県の池ヶ原の在所に帰った。父母兄妹は喜んでくれたが、私の服装は粗末であるし財布の中はカラッポであるので、どうにも結婚の勇気がわかないし、親族も世話してくれそうもない。開拓団も集団経営の段階では個人の財布には金が無いわけだが、どうも日本では現金収入が「結婚の条件」らしい。そこで開拓団在籍のまま、義勇隊の教師に向うことを考えた。

そのころ、城子河団の佐藤団長が新設の義勇軍の寧安大訓練所（収容五千人）の所長を兼任して団と訓練所のかげ持ちで多忙であるのを見ていたからである。

私は佐藤団長に推薦してもらい内原に在る幹部訓練所を経て、一面坡訓練所の教師に採用された。月給百十円、ほかに語学手当十円、二十四歳の秋であった。

この勇ましい呼び名の青少年義勇軍とは、例の加藤氏らが政府要路に献策して始まった運動で、関東軍の対ソ戦略の一環をなすものであった。北滿州のソ連との国境地帯の内側に広がる大荒蕪地帯を選んで北から嫩江、対店、鉄驥、勃利、寧安に各々一万ヘクタールほどの面積に二十中隊、五千人収容の大訓練所を、更にその内線の昌図、ハルビン、一面坡にも各々五千ヘクタール前後、十個中隊二千五百人規模の待機用の特別訓練所を昭和十三年、滿州拓殖公社の手で急造して、内地の内原訓練所で一定の訓練をした訓練生を受け入れ、一年訓練し、更に中隊列に設置する小訓練所に移動して二年の訓練をして修了とする。

修了した者は開拓団員として開拓団を構成するといふ構想であった。関東軍はドイツのヒットラーに対比してか、大訓練所、特別訓練所に「不沈空母」を期待しており、そのことを強調していた。だから引揚げに

死亡した義勇軍こそ国策の殉難者になったのである。

#### 義勇隊生活の一面

私は渡満以来六年の開拓生活の中で、初めて月給という現金を手にして嬉しかった。

一面坡はハルビンから牡丹江に至る賓綏線の間にあるビールの名所で、“北満の嵐山”などとも呼ばれた人口四万人の小都市である。訓練所は町の南の山を越えた大草原で、本部は坡南郷に置かれ本部の下に三個大隊、二十個中隊の宿舎が用意されていた。

各中隊から差し出される本部要員のための本部中隊も編成されていた。

私は重岡清所長に話して、本部中隊長や、興隆屯大隊主任に任命してもらって、魚が水を得た思いで張り切って訓練にいそしんだ。

青少年義勇軍とは日本内地の呼び名で、満州では青少年義勇隊と呼んだ。入植計画がにわか造りで、現地の建設経過も粗雑で隊員宿舎も山東苦力の長屋に毛の生えた程度の粗末なものであった。こともあろうに本部中隊の宿舎の煙突から出火して、見る見る燃え広が

り、訓練生は零下三十度の寒空に焼け出されてしまった。ペチカのれんがのすき間から草屋根の草に火が移ったのだから、たまったものではない。皆が逃げのが精一杯で、焼死者が無かったのがせめてもの救いであった。

訓練生の被服、日用品はもち論新京の訓練本部から補給されたが、私の渡満以来、六か年の開拓生活で蓄えた若干の個人財産（満州服などの身の回り品、生活道具、図書など）は焼かれ損であった。私はこれも“開拓者の苦難か”と天を仰いで嘆息したのであった。

#### 荒れる義勇軍

義勇軍は満州での全寮制の青年学校とも言えようか。一個中隊は二百五十人で、五個小隊から成っているが中隊には中隊長以下事務、教学、農事、教練を担当する四人と、別に寮母の計六人がそれぞれ任命され、生徒と起居を共にして、訓練に当たっている。訓練といっても寒い満州での衣食住の全生活の世話であるから実は、手が回るわけがない。

同じ訓練所でも、同じ大隊でも、各中隊は出身県別

であり、渡満年次もちがうと、日本人の悪いくせで、古年次が新米者をいじめる悪風が横行する。丁度軍隊で古兵が新兵をいじめるのと同じである。

私が興隆屯大隊の主任をしていた時のこと、本部の經理担当の生徒が、大隊からの糧秣受領者に定量の半分しか渡していなかったことが、後日判明して大騒ぎしたこともあった。また大隊の下で、新入りの野田中隊（栃木出身）が古参の崎上中隊（佐賀出身）にいじめられると中隊長が新京の訓練本部に「直訴」して中隊ごと地区外に移転した例もあった。

一番はなほだしいのが昭和十四年に昌圖訓練所に発生した「昌圖事件」であった。訓練所は旧張作霖軍の兵舎のあとで、満州国軍と同居していたが、たまたま開催した中隊対抗の大運動会が、得点争いになり、ある中隊が古参中隊に向かつて、ラッパを吹いて中隊長が先頭で抜刀で切り込むという「勇ましい」事件に発展してしまった。結局百余人が奉天の監獄に入れられたという事件であるが、当時の新聞には出なかった。

この種の事故の根源は、義勇隊が外面の派手な宣伝

のわりに教学の根本が空疎であったことにある。訓練所には全員がたよるべき教科書というものがなく、朝礼で唱える「いやさか」とか「やまとぼたらき」それに日中の農作業と警備当番での兵隊のまねごとぐらいで、あとは炊事、不寝番程度で、最も人生を真剣に考える年令、進路を模索し、知識を求め、技能を要求している青年たちに対して与えられた環境は余りにも荒涼としており、教えられ、与えられることが余りにも少なかったのではなかったか？

私は本部中隊で佐藤信淵の宇内混合秘策を講じて見たが、反応が乏しかった。また中国語（満州語とも呼んだ）を教えようとしたが、日本人の優越感が先行して、受け付けられなかった。

義勇軍綱領の眼目である「天祖の皇謨」とか「一億一心」とかに至っては、実に神がかり的で青少年の心をとらえるものでなかった。

生徒は個人で相談に来ることの多くは進路の問題で、寒い満州で農業に進むのだと思い定めている者は少なく、仕方がないので、将来は軍隊に入って現役志願に



進みたいという者が案外に多かった。

訓練本部は農外志望者に対して吉林の人造石油会社  
に付属訓練所を設置して進路を与えた。それでも不満  
で生活が荒れる生徒に対しては北安省に特別に朝水訓  
練所というのを設けて専門的に対処したが、それでも  
足らず、一面坡の太平洋大隊を特別訓練に当てること  
になった。ドイツのヒットラーユーゲントや後年の中  
国の紅衛生に似て、青年運動には、どこか無理と歪み  
が生まれて来るのだらう。

私も、義勇隊に青春をささげたが、どうも、ミイラ  
取りがミイラになる”自分を感じずにはいられなかつ  
た。

#### 国都新京での生活

私は新しい生活を求めて十年の開拓地のランプ生活  
に別れを告げて、満州国の国都新京に出て来た。昼は  
訓練本部で働き、夜は国立新京法政大学で学問をする  
ためである。

さいわいにも宝清路にあった訓練本部の住宅に入り  
内地より家族を迎えることも出来た。

訓練本部（本部長は井上政吉陸軍中将）では総務部  
監理科の企画調査係で私は新米ながら調査月報を担当  
した。全くの”山出し”で事務のやり方にめんくらう  
ことが多かった。

学校の方は特修科（夜間部）の経済学部で学生は漢  
族、日本人、朝鮮人、蒙古人が同室で授業は専ら日本  
語で、統制経済論などは、おおよそ学問とは程遠いも  
のであった。

そのころは国都の新京も戦時色をつよめ、住宅難、  
通勤難が進み、物不足、物価高で銃後の市民生活は日  
増しに不如意になっていたし、日本人には郷軍の訓練  
が行われ出していた。

#### いざ本土決戦へ

太平洋戦争の戦局が苛烈となり、今から大いに勉強  
しようとしていた矢先に十九年三月、とうとう私に赤  
紙（召集令状）が来た。

私は新京に家族を残したまま、ハルビンの歩兵一七  
七部隊に入営した。数え年三十歳の補充兵の老兵で  
あったが、兵舎の中ではなきけ容赦はない。星一つの

新兵は、われ自らがかわいそうでならなかった。

いかめしい班長や、子供のような若い教官（少尉）が、面白十分に老兵の私をいじめた。そのうちに中隊の一人の補充兵が、井戸に投身自殺をしたと知らされた。（部隊長訓示には私的制裁の禁止とあったが）

私はこの生活からの脱出を決意して、年齢も顧みなく、幹部候補生を志願したのであった。そして猛烈な勉強で、典範令の暗記をくりかえし、どうにか第一次試験に合格した。

その内に部隊は北方の嫩江に移駐し、七月には主力が「南滿演習」という名目で深夜ひそかに南方に出動して行った。そのころは比島の戦局は急を告げていた。残された幹部要員は更に大興安嶺を西にこえた免渡河の五五八部隊に転属となりホロン・バイルの草原で血の出るような甲乙選別の猛訓練を受け、甲種合格者は十月一日に熊本郊外の西部軍教育隊に入隊した。私は新京に残した家族に後髪を引かれる思いで一路南下し、玄界灘を南に渡ったのであった。

昭和二十年の天長節の卒業式には千二百人中第二位

で恩賜賞の「光榮」に浴した。いよいよ本土決戦である。私は北九州や神戸市などのB29の爆撃のあとの残骸を見ながらまじりを決して京都伏見の三七部隊に赴任した。

敗戦の日々

沖縄は失陥し、B29の大編隊が連本土の爆撃をくり返し、大阪の焼けた煙がいく度か京都の空を覆い黒い雨を降らせた。

五月末の某日、大本営は満州の四分の三（連京線以西、京圖線以南）の放棄を決定して関東軍へ命令していた。それは国民には一切秘密であった。在満邦人も「満州国」も、その時点で切り捨てられたのである。しかも許しがたいのは、そのことを隠すように、国境に敵とる開拓者や在満邦人を召集して、南方などに送った。

私は三七部隊の作業中隊付の見習士官として任務の遂行に全力をあげた。例えば四国の善通寺、松戸の工兵学校、播州の青野原にも出張して対戦車攻撃の研究に従事した。

七月二十六日に、ポツダム宣言が発せられた。次いで、広島、長崎の原子爆弾攻撃とソ連軍の開戦となる。

自由民主主義、理想国家建設には、当面不自由な生活も克服して、五族協和の王道楽土を建設し、各民族協和なき国家群には平和はあり得ない根本理念を、世界各国にその範を誇示せんとしたのが仇となり、日本敗戦、満州国瓦解となった。

八月十五日、部隊の宮庭で整列して聞いた詔勅の音聲は不明確であったが、陛下の大御心を拝察しながら、痛恨きわまりなかった。そしてまた私は、今日こそ日本民族の新生の日だと思った。

が気になるのは、満州に残った同僚（開拓同志）家族のことである。ラジオは新京市民は八月十二日疎開を開始したと報じたのみで、一切は不明であった。

ああ、異国の丘に果つ

私は除隊して、京都西ノ京に住む次兄の家に身を寄せた。満州での応召者は布団一枚さえない、正に敗残兵であった。

市民は食べ物に窮して、闇市で命をつなぎ私にも適

当な職場があるはずもなく、食糧の買い出しで明け暮れた。

年が明けた二十一年五月にコロ島からの引揚げが始まったが一向に家族らの消息が不明、敗戦後一か年がすぎた十月の末に佐世保港から会計課の森脇綾子さんの手紙が届いた。

「新京の家族たちは八月十二日、疎開列車で新京を立ち国境をこえた北朝鮮の平安北道の亀城郡方岨面で終戦、その小学校で集団越冬した。暖房も布団もなく母子が呎一枚の上で抱き合っているような生活だったので、栄養失調で死者続出。春もすぎ夏も終わった九月にそこを出て、百里の道の子供を背負って野宿しながら三十八度線を越えて辿りついた京城郊外の議政府の米軍キャンプでは子供たちも亡くなった。」というのが手紙の要旨であった。

私は茫然自失した。だれが一体、北朝鮮待避を命令して死地に陥れたのか。私は心から若き日の不明を恥じた。同胞たちに突に申し訳ない罪を犯してしまった。満州開拓とは一体何であったのか、私の青春とは一体

何であったのか。同胞の死にどう謝罪すべきか。

「満州」には開拓民も含めて約五十万の日本人が居住していたと思う。だから敗戦による引揚者も満州が一番多いのではないか。

いまでも「満州は良かった」と思っている。

世界にはいまだかつて例をみない異民族協和の、自由民主主義国家建設という崇高な理念で進めていたからである。

しかし、満州国建国の後半において、関東軍の独断専行で、民族意識が離反思想を芽生えさせたことは、当時の若い私どもの心胆を寒からしめたものがあった。

日満一徳一心と称したが、満系の月給は日本人の半分で、公用語は日本語、食糧の配給なども、量、質ともに民族で差があった。『道義国家』も実は人種差別の社会を改正すべく唱導していたが、実施にいたらなかった。在満の日本人はすべてを放棄して引揚げねばならなかったことなど。「満州国」は今後の日本の歴史にとって忘れてはならない、永遠の教訓である。

#### 【執筆者の横顔】

水上氏は石川県の農家で、大正四年生まれ、身はひ弱い感じだが、心が強く、理知に長けていると幼少ころからいわれて育った。名門金沢一中を卒業したが、大学進学へと親の歴をかじることは自責の念にかられた。

そのころ、新聞紙上に新満州国に人材養成の満州鏡泊学園の創設とあるのが目にとまった。外地発展に夢を描いていた水上氏は、男児志を立てて郷関をはずの悲壮な決意で学園に入り、言論界の巨峰徳富蘇峰、駒井徳三満州国総務長官の講演などが強く印象づけられた。

いよいよ、渡満にあたり、荒木貞夫陸相、永井柳太郎拓務相の励ましのことばをうけ、勇躍玄界灘をわたり大陸満州の鏡泊学園で学び、在園三年にして建設いよいよ軌道にのり始めたころ、学園総務山田悌一氏より指導官に任命された。

しかるにその後匪襲にあい、山田悌一総務ら十四人が殉職するいたましい悲劇にあう。ひいて学園解散の

止むなきに至った。

水上氏は、国を治むるは耕すことなり、とし第四次の基幹開拓団、次に佐藤修団長から青少年義勇軍の訓練所教師に任ぜられた。

その後、新京に出て一からやり直しというわけで新京法政大学に入り、昭和二十年三月経済学部を卒業した。ところが三月十一日ハルビン第一七七部隊に入隊せよとの召集令状が来た。入営直ちにハルビンより朝鮮半島を縦断、釜山から門司にわたり熊本の子備士官学校で戦略戦術を習得の勉強で、彼は成績最優秀で恩賜の賞を受ける光栄に浴し陸軍少尉に任ぜられた。やがて京都師団に配属したばかりで終戦となった。

終戦後、出身は石川県であるが、異郷とはいえず住みついた京都市であるところから、昭和三十年、京都市議員に立候補して当選以来、連続五回当選、その間副議長に就任、その傍ら京都府私学退職金財団理事長、京都府日中友好協会理事長、京都市選挙委員長などを歴任して藍綬褒章、勲四等の受賞に浴した。現在は京都市選管委員に就任している。

彼はうそは言えない、飾ることを好まない、酒、煙草をたしなまない、それでいてユーモア、博愛心に富む、東西南北いずこに行っても個人、団体どこからも信用され、もちいられる、力量もちろんであるが自ら人徳そなわっている人物である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## 引揚げの記録

兵庫県 浜崎 豊子

新天地大陸へ

平成五年一月、私は健康で七十歳の誕生日を迎えました。私が渡満したのは昭和十四年、半世紀も前のことなのに、昨日のことのように生々しく記憶に残っています。

私は東支那海に浮かぶ離れ島で育ちました。耕地は少なく食料の乏しい半農半漁の寒村で、卒業を機に都